

Message

本人の自立支援に向けて

高知県知的障害者育成会 理事長 福永康夫



創立から65年経った現在、医療と福祉と教育が一体となり温かい支援が行われ笑顔で豊かな生活ができるようになりました。私たちはどんなに多くのサービスの恩恵をいただいているか再認識し、社会的保護を十分に受けられなかった障害者のことを思うと、いろいろな疑問があるとはいえ、感謝を忘れてはならないと思います。現在いただいている支援は、障害のある人たちと家族の長年にわたる訴えと、闘いの賜物であると思います。このことは、長年にわたる多くの行政の方々、専門の先生方、施設職員、ボランティアの皆様のおかげと深く感謝いたしております。

そんな折、神奈川県相模原市の「津久井やまゆり園」で生活しておられた障害者が殺傷されるという事件が起きました。障害のある人に対して「障害」を理由としたこれまでにない最悪の事件であります。事件の容疑者は「津久井やまゆり園」の元職員であったこと、重度の障害者が生きていくのは不幸だと談じ、不幸を減らすためにやったと供述していること、障害者に対して強い偏見を抱き標的にした

計画的な行為であります。一人の特殊な青年の犯罪としてかたづけられるものではないと思います。

私たち育成会は、「障害のあるなしにかかわらず、一度きりの人生をその人らしく送ることが可能になるように努めます」を法人の理念としています。今回の事件で障害を持つ方々が、不安になり生活が脅かされることのないように、なお一層理念の実現に向けて運営をしていきたいと考えています。

障害者を取り巻く環境は変化しつつあります。次々に障害のある人にかかわる法律や条令が整備され、目まぐるしく制度やサービスが変革し、本人や保護者が理解するのも大変ですが、我が子のためにしっかりと学んでいかなければならないと思います。

果たして新しい制度が障害者本人にとって、本当に良くなっているのかどうか、私たちはこのことに関心と責任を持ち続けなければならないと思います。障害者本人を中心にした使いやすい制度が必要です。課題は山積みしておりますが、決してあきらめることなく、課題解消のためにみんなで考え、皆で活動す

る地区育成会、親の会活動が必要であります。お互いが気兼ねなく何でも話せる仲間がいることが大切です。更に、各行政の方々をはじめ関係機関、関係団体、地域の皆様等、関係者の皆さんとの信頼関係を築き、時代に即した活動を次世代につなげ、知的障害者ばかりでなく、弱い立場の人々の生きる権利と幸せを守るため、知的障害者・重症児者の生活実態や日々の暮らしの中で、関係機関に何に困っているかを丁寧に説明し、一度の説明で十分でないと感じたら、何度も繰り返し出かけ、説明を行い、社会の皆様にご理解をいただけるように、今後も心がけていきたいと思っています。

また、育成会にとりましても変革の時が来ているのではないかと感じています。一つは、利用者本人たちの障害に合わせた施設事業所の設立であります。このことを実現するためには多くの課題を解決しなければならない事柄が沢山あります。まだまだ社会的保護を十分に受けられず福祉の谷間で暮らしている重度の障害を持った人々がいるのではないかと感じています。この方々への支援が必要では……。支

援が受けられる日を待っておられるのではないのでしょうか。

二つ目は本人たちの自立を推進するための就労先の拡大、賃金アップです。ある保護者さんから相談がありました。「本人たちの自立という言葉をよく耳にしますが、現実はどうでしょう作業が減少し、今の作業量では、自立生活を行うための必要収入には程遠いです。親亡き後も心配です」と、理想と現実の違い、このことから、仕事の発注先を求めて事業所管理者に同行し、仕事を求めて行政等に要請に行っていますが厳しい状況にあります。しかも、A型事業所においても、一つの作業受注を一般業者との入札となり、福祉施設だからという優先発注が薄くなり、仕事の減少が心配されます。そこで、仕事を外に求めることだけでなく、育成会の新たな事業として、何かできないか協議を重ねた結果「福祉工場かがみの」の一階を改修し、「食材（加工したもの）の配食サービス事業」を新規事業として、導入をいたしました。（新事業所名称：“SORA”と変更）また、喫茶ひまわりの分店「喫茶Café sonne（カフェソネ）」を

開店して就労場所の拡大を図ることができました。

先日、地区手をつなぐ育成会連絡協議会において、本人提言のなかで「食材の配食サービス事業」実施について、本人さんたちの生の声を聞かしていただくことができました。「嬉しかった」と「う〜ん」と考える言葉をいただきました。それは……まず、嬉しかった言葉：①食事がおいしくなった。（自分たちが食材加工しているから）②職場がきれいになった。③制服が良くなった。最後にSORAの仕事を喜んでいます。

「う〜ん」と返答に窮することとなったのは、給与をあと一万円アップして欲しいとの提言でありました。私たちが給与アップができるように頑張ります。

今後も育成会として、目の前に見える課題を解決することによって終わることなく、さらに数年後を見据えた方針、目標を立てて取り組んでまいります。そして障害のある人やその家族の人、加えて支える人々が笑顔になれるように努力して参りたいと思います。育成会の活性化を図るため皆様のご理解、ご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

Topics

歩み

香南くろしお園事業所移転を通じ

平成23年3月11日、東日本を未曾有の大震災が襲った日、高知県は震度2を記録。当時、私たち香南くろしお園は香我美町岸本地区の海岸線に位置していたことから、津波対策として「早めの帰宅送迎」「独居利用者さんの避難所誘導」に追われました。一通りの対応を終え安堵を感じたころ、テレビに映る今まで見た事のない被災状況に衝撃を受けました。「地震・津波に気をつけよう」今まで繰り返し聞き、話をしてきた言葉でしたが、震災の日を境にその重みが変わったのを覚えています。「利用者さん・職員の命を守る」そのことが事業所移転計画の出発点でした。

移転計画は地震・津波対策が基本ではありましたが、事業所では長年「利用者さんの重度高齢化」「利用人数増に伴う手狭さ」といった課題も抱えていました。「もし新たに事業所を建築できるなら、今後数十年に渡り利用者

さん・ご家族が笑顔になれる、安心して過ごすことができる環境を整えていきたい……」移転を心待ちにされている利用者さんの姿を見るたび、そんな気持ちが強くなってきました。

計画を進める中、始めに立ちだかつたのが「用地問題」でした。平成6年の施設設立時、利用者14名でスタートした本園は、20年余り時を重ねる中で3倍強の48名となりました。障害状況や年齢などニーズの多様化が顕著となる中、移転用地に対しては「津波・浸水区域外」といった条件の他「利用者人数に応じた広さ」といった事も求められるようになりました。

「施設を建てる土地を探しているんです」そう話すと、ほとんどの方は「土地はなんぼでもある」「使っていない畑がどっさりよ」と答えられます。私自身もそう感じていましたが、その考えはすぐに打ち消されました。計画をはじめ最初の4年で探した候補地は30



はじめの場所
無認可施設「くろしお作業所」



23年過ごしてきた香南くろしお園
地域密着型の施設として支え
支えられてきました



香南くろしお園 外観
横からの正面



落成式での餅投げの様子 晴天の中、
たくさんの人に来ていただきました

箇所以上、関係法令のクリアを含め要件を満たす用地はありませんでした。

打開策を求め様々な資料を読み漁る中、書棚にあった香南くろしお園の記念冊子「あゆみ」を開く機会がありました。そこには昭和の時代、自分たちの町に障害のあるわが子たちの居場所をつくらうといった「作業所づくり運動」に携わり、賛同した人たちの姿が記されていました。冊子を読み進める中で今直面していること、これから向かう新たな事業所づくりのこと……重なることが多く、先駆者たちの軌跡を辿ることで何かを見つけていくこととしました。

昭和55年、今ほど障害者福祉がない時代、障害のある人達の自立と福祉の向上を願い「香我美町手をつなぐ育成会」が設立。その後、昭和57年に香南5カ町村(野市、香我美、夜須、吉川、赤岡)による「香南地区手をつなぐ育成会(現 香南市手をつなぐ育成会)」へとつながっていきました。

当時、特別支援学校卒業後「なかなか就職できない」「住み慣れたまちで過ごす場所がない」

といった進路問題があったとのことです。今でこそ本人の意思に基づき福祉サービスを選択するといった制度・仕組みがありますが、通所施設が身近に少ない時代「家族と暮らしたい」「地域で働き・過ごしていきたい」といった願いを叶えるには受け皿が少なく、昭和61年、ご家族を中心に「自分たちの手で作業所をつくらう」といった運動が始まったとのことです。

香南市手をつなぐ育成会の運動は、やがて多くの人たちを巻き込みその輪は広がっていきました。関係者が一丸となることで昭和63年7月には“くろしお作業所”として入所者5名よりスタート。その後、平成3年には作業所から社会福祉一種施設(当時)に向け再び施設づくり運動が開始されました。いずれの運動も関係者が協力しあうことで、行政をはじめ地域の方々の理解協力を得ることにつながったとのことです。

なにか物事を行なう際、理解者や協力者の存在は、自分だけでは出せない力や支えになると思っています。私たちの仕事も同じではないでしょうか。

今回、苦難に面した用地探し

も、ねばり強く続けていく中で、出会った人達がつながるように協力者の輪も広がり、やがて土地の確保にまで至りました。その方たちは、今尚、助けになってくれています。

香南くろしお園は設立以来“地域と共にある”といったこと大切にしてきました。この“考え”は「地域に自分たちが求める施設をつくる」といった強い信念をもって立ち上がった人たちと、それに賛同した人たちが植えた“種”なんだと感じます。その“種”が生んだ施設は人々の関わりや時間の経過の中、樹木が年輪を重ねていくように幹を太くし葉を茂らせ、地域に当たり前にある風景のように馴染み育っていくように思います。

今回、事業所移転を通じ感じたのは「地域とのつながり」でした。多くの方より知恵や励まし、理解や協力等を得て一つの施設が完成することができたのだと実感しています。

平成29年1月、約7年間の月日を経て事業所を移転。作業所時代より30年近い日々を過ごして来た地域を離れることとなりました。施設は新たになりましたが、先駆者達が築き上げた“地域と共にある”といった種を、新しい土地でも同じように根を張り枝を広げていけるよう歩みを続けていきたいと思います。

香南くろしお園
石川 俊光



新築
ここから、

Topics

暮らしを支える～ グループホーム～

楠目荘は平成5年4月に「福祉ホーム」として定員20名でスタートしました。その後平成18年の法改正に伴い、グループホームとしての位置づけになりました。開所以来、のべ50人以上の利用者さんが利用され、障害がある方に生活の場を提供するという重要な役割を担ってきました。しかし近年は老朽化が

目立ち、掃除をしても取れない汚れや傷が多く見られたり、設備の故障が多く出ている状況でした。そこで、平成28年5月から約2カ月をかけてホームの改修を行いました。

先日、九州を襲った大雨のニュースを見ていると、月並みでも日々の安定した暮らしや住まいがあることが、いかに尊い事であるかを改めて感じざるを得ません。それは利用者さんにとっても同じことだと思います。住まいの場所はただ屋根があつて雨風をしのげれば良いの

はなく、清潔で、プライバシーが守られ、快適な環境が確保されることが大切です。気持ち良い環境で暮らすことは、情緒の安定や心身の健康にもつながることだと私は考えています。

さて、今回の改修の場所は、個人のスペースである居室と公共スペースである食堂・風呂場・トイレ・玄関・階段・廊下と、かなり大掛かりな工事でありながらも、利用者さんには通常の生活や日中活動を維持していただきながらの工事でした。一部の利用者さんには、工事期間内は帰宅

していただいたり、別のホームに移動をお願いした方もいました。

工事を請け負った「宗石建設工業」に協力を得て、改修場所を3段階に分けて対応していただいたので、それ以外の利用者さんは、工事中の居室から工事をしていない居室へと何度か引越しをしながら、約2カ月を過ごしました。梅雨時期から初夏にかけての引越しは利用者さんも職員も大汗をかきながらのハードな作業でした。なるべく工期を短くしていただきたいと、日曜日以外は毎日工事を行っていただきまし

た。多くの利用者さんが休日にも、金槌や電気カッターの音がホーム内に鳴り響き、テレビの音も聞こえ難いという環境を強いてしまう状態で、大変ご迷惑をかける日が続きました。

食事は従来、外部委託の業者に楠目荘の厨房で朝と夕の食事を作っていただいていた



第16回

Report

高知県知的障害者
育成会職員研修会報告

しょうぶ学園学園長 福森様との座談会



クック・チャム 藤田様

7月29日 ホテルアンジェブランで第16回法人職員研修会が開催されました。

参加者174名。(うち法人職員146名) 他関係機関の方々にも多数ご参加いただきました。

今年度から、年2回開催を年1回に変更することになり、より内容の充実したものをということで今回の企画は大変苦労しました。

今回の研修会は、就労継続支援A型事業所SORAが担当です。「働く=活動」をキーワードに、法人理念に掲げる「一度きりの人生を、その人らしくより良く生きることを応援します」という意味を、今一度深く考えてみようということになりました。

午前中は、講師に藤田敏子氏(株式会社クック・チャム代表

取締役社長)を迎えて「おかずや 日本のお母さんの道」と題してご講演をいただきました。

昨年、SORAが新規事業立ち上げの際、愛媛県新居浜市で先進的に事業展開している(株)クック・チャムへ見学に行かせていただき、それがご縁で今回の講師をお願いしました。

まず、映像で会社紹介をしていただきました。地域に密着したお総菜屋さんとして、全国に74店舗+食堂を展開。「お母さんのおかずを家庭の台所で調理するのと同じように作る」というコンセプトで、ひと手間かけたお惣菜が人気のお店です。

全て手作りのお惣菜は、工場内で惣菜キットとして製造されます。そのキットが、それぞれの店舗に配送され、各店舗で調理されるため適温で美味しいお惣菜の提供が可能になっているわけです。

藤田様は知人を通じて障害者との出会いがあり、高齢者や障害者の「働きたい」を実現するために、それぞれができる仕事を整備し、積極的に障害者との共働を進められています。

愛媛と北海道に就労継続支援A型事業所を立ち上げて、

北海道で収穫したじゃが芋やかぼちゃ等の野菜を愛媛で加工調理して商品にする。北から南へ食を通じて繋がっていること不思議さと同時に、この仕事に壮大なロマンを感じました。

お母様から引き継がれた「日本のお母さんの心」を伝えていくという使命を持って、フードビジネスを展開している姿に会場の参加者が大いに共感し感銘しました。

最後に、お母様が藤田様に残された「世のため人のために真心を込めて」というメッセージは、改めて、私たちに大切なことを思い出させて下さいました。午後から、映画「幸福は日々の中に」の上映会とその後、映画の対象となったしょうぶ学園 学園長の福森伸様をお招きして、座談会を行いました。「僕は僕でしかないのに 何を変えたいというんだろう」というテーマのもとに、福森様を囲んで田中部長と岡本部長が、映画の内容と共に福森学園長の福祉観について伺いました。

しょうぶ学園の日常の風景を「otto & orabu」の音楽と共にゆっくりと映し出される映像に、誰もが心を癒されました。

1984年に、工房しょうぶを設

立し、知的障害を持つ人の様々な表現活動を通じて本人の持つ才能を全面的に開放し、発揮させることに主眼を置いており、近年では国内外でその活動が注目されています。

その作品の力強さや繊細さや言葉では表せないものが、見る者の心を動かすのは何故なのでしょう?

「開設当初は、委託作業を行っていましたが、重度の利用者は、うまく仕上げる事ができない。できないから職員が指導訓練してできるように努力する。しかし、この行為に本人が満足しているか? 彼らに何かを教えるのではなく、彼らのやっている事を社会化していくことが、我々のサポートであり役割である。つまり、システムに人を合わせるのではなく、人にシステムを合わせる。そのために、システムを変更すればいいのです」という考え方には目からうろこでした。

また、「職員は決して指導する姿勢をとらない。障害を持つ人たちは、他人の意図や意思に合せることが苦手なだけであり、それを少しでも上達させ、社会に合せられようとしてあげたいと

思うのは、健常者の思いであって、彼らの思いではない。彼らの一人ひとりが持つ個性をそのまま、丸ごと素晴らしいと思ってあげられることから、お互いの幸せな関係が生まれる」といった力強いアドバイスをいただきました。

施設パラダイス論も話題になりました。賛否両論はあるかと思いますが、入所施設をご利用している方にとって一日一日を本人らしく生きる事を応援するために大切な視点であると思います。障害の捉え方も立ち位置によって、障害の対象が変わるという柔軟な物の見方、考え方を学ぶことができました。

福祉が、社会情勢に振り回される事なく、物事の本質を見抜きながら、常に本人に寄り添いながらサポートをしている本来の在るべき姿に感動と勇気をいただきました。

今後も、しょうぶ学園の活躍に目が離せません。一步でも近づいていきたいと思ひます。

今回の研修会では、自分自身の価値観が問われる研修となりました。関係各位の皆さまご協力有難うございました。

就労継続支援A型事業所 SORA
柴田 国博



香南くろしお園外観
新しい歩みを始めていきます

が、厨房も使用できなくなりました。そこで朝食のご飯は、楠目荘の世話人が炊いて準備し、副食は学生向けにお弁当を朝から作っているお店に無理を聞いていただき、早朝惣菜を入れたパックを、支援員が毎日配達して対応しました。夕食は利用者さんが勤務している「障害者就労継続A型事業所・ウエルジョブ&キッチン」からバランスの取れたお弁当の配達をしてもらいました。こうして多くの方々からのお力添えにより、工事期間中の難問もなんとかクリアしてきました。

そして今年4月からはフードワークス「SORA」から配食を受けて、「安心安全で美味しくい

ただけるメニュー(わだち Vol.9より)」を毎日提供していただいています。

リニューアルした楠目荘には細かな工夫がいくつかあります。たとえば1階と2階の床の素材が違います。2階の音が1階へなるべく響かないようにクッション性の高い材質になっています。また、居室を少しでも広く使ってもらえるように、従来押入れだったスペースを取り払いました。代わりにカーテンレールを備えて、持ち物を隠すことができるようにしています。トイレも最新式の洋式トイレを導入しました。

楠目荘内のメンテナンスは、利用者さんそれぞれ「食堂」「廊

下」「風呂場」等の掃除の担当場所があり、責任を持ってホーム内の美化に努めています。

ところで、男女混合の形態で生活されている利用者さんは、高齢になり通院件数が増えている方や、若くて血気盛んで仕事も頑張るけど遊びにも熱心な方と、年齢や性格が様々な方が同居しています。今年2月の龍馬マラソンを4時間1分17秒で完走したスポーツマンも居ます。平日は働きに行く方、福祉事業所に通所される方と様々です。休日の過ごし方も、公共交通機関や自転車を使って遠方まで出かける方や、日曜市に必ず顔を出す方。ホームでゆっくり過

ごされる方や、ほぼ毎週末に帰省される方等様々です。楠目荘は1人ひとりの暮らしを大切にしたい生活の場としてあります。

今回ハード面はある程度整備できました。今後は上記のように多様な利用者さんの生活を一層充実したものにしていくため、ソフト面の整備が求められます。世話人、夜勤の職員、支援員と協力しながら、安心して安全なホーム・気軽に申し入れや相談をしていただけるサポート体制作りを目指して取り組みます。

先の七夕の頃にはホームの玄関に笹の葉を飾り、短冊に利用者さんの願い事が書かれていました。「健康で過ご

せますように」「みんなで仲良く過ごしたい」「世界が平和になりますように」等々、願いは様々です。そんな願いが少しでも叶いますように。これからも健康で生き生きと暮らしていただけますように。みんなの輝く笑顔がこれからも何度でも見ることができるよう。今後の楠目荘での生活が快適なものでありますように願っています。

ライフサポート「かがみの」
甲藤 道夫



Report

平成28年度

社会福祉法人 高知県知的障害者育成会 決算書

法人単位資金収支計算書

(自平成28年4月1日 至平成29年3月31日)

(単位:円)

Table with 5 columns: 勘定科目, 予算(A), 決算(B), 差異(A)-(B), 備考. Rows include 事業収入, 施設整備等収入, その他の収入, 事業活動収入計(1), 施設整備等支出, その他の支出, 事業活動支出計(2), 施設整備等支出計(5), 当期資金収支差額合計(11)=(3)+(6)+(9)-(10).

法人単位事業活動計算書

(自平成28年4月1日 至平成29年3月31日)

(単位:円)

Table with 5 columns: 勘定科目, 当年度決算(A), 前年度決算(B), 増減(A)-(B), 備考. Rows include 事業収入, サービス活動外収入, 特別収入, 増減, 繰越, 活動, 増減差額の, 次期繰越活動増減差額(17)=(13)+(14)+(15)-(16).

第三号第一様式

法人名 社会福祉法人 高知県知的障害者育成会

法人単位貸借対照表

(平成29年3月31日現在)

(単位:円)

Table with 8 columns: 科目, 当年度末, 前年度末, 増減, 科目, 当年度末, 前年度末, 増減. Divided into 資産の部 and 負債の部. Includes 流動資産, 固定資産, 流動負債, 固定負債, 純資産の部.

ご意見・ご感想

機関紙「わだち 報」に関するご意見・ご感想などございましたら、下記連絡先までお寄せください。

いただいた貴重なご意見を今後の機関紙づくりの参考とさせていただきます。

社会福祉法人 高知県知的障害者育成会

TEL 088-855-3717

FAX 088-855-6181